県立博物館 学芸員の研究リポート ▶▶16

小場恒吉 文様研究の第一人者

県立博物館の「秋田の先覚記念室」で紹介している152人の中に、秋田市出身の小場恒吉（1878～1958年）がいる。東京美術学校（現東京芸術大学）の教授を務め、文様学、意匠学の第一人者だ。秋田市の市章や秋田工業高校の校章をデザインしたことでも知られ、大正時代には秋田市・千秋公園内の佐竹義堯公銅像の台座の設計に携わった。戦後は、戦中の金属供出により台座のみを残して失われていた像を再建する際に尽力した。

当記念室で保管している小場の資料は、戦後の学術調査に関係するものだ。このうち実測図（写真①）は小場の自筆資料で、極細のペン画に淡く彩色されている。一見ラフスケッチのようにも思えるが、その実精緻を極め、各所の寸法や曲線のカーブ、中心となる容器の周りに配された細かな玉粒の状態まで、何一つ見落とさず記録するよう細心の注意をもって描き進められたことをうかがわせる。

小場恒吉

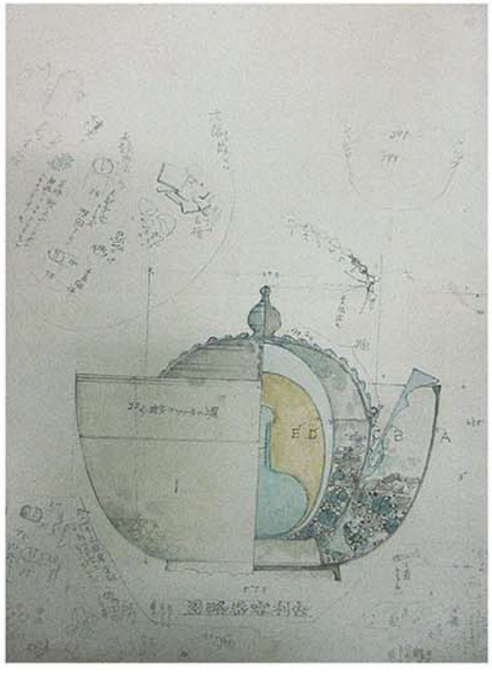
描かれているのは、佐波理（銅合金）製の鋺に古鏡と共に置かれた金銅の合子、玻璃（ガラス）や香木の砂利が敷かれ、金の卵を抱えた銀の卵がたたずむ。最奥に眠るのは瑠璃の小瓶。まるでおとぎ話の宝物のようだ。

▼▼

1949（昭和24）年、世界最古の現存する木造建造物として有名な奈良県斑鳩町の法隆寺において、発掘された舎利容器と付属品に関する調査が行われた。これらは、建物の中心を貫く心柱の真下にある心礎石にうがたれた穴の中にあり、長く人の手を寄せ付けなかった。

これらを公開するか、専門家による学術調査を行うかについて、寺院側と研究者側が対立した。対象は信仰の核ともいえる仏舎利を納めた遺物であり、触れざるべき宝として地下に隠されていたものである。寺院側は、公開して冷徹な科学の目にさらすことを拒否する意向を示した。

当時の報道は、拒否した寺院側を頑迷の徒のように批判する内容が多かった。一方、秘宝の精神性を軽んじた研究者の唯物的な姿勢が宗教者の態度を硬化させた、と研究者側の反省を促す意見もあった。



（写真①）小場が1949年の法隆寺五重塔秘宝奉拝調査で作成した「法隆寺五重塔舎利器略図」＝県立博物館蔵

この問題は衆参両院の文部委員会でも取り上げられた。文部省（現文部科学省）と寺院側の話し合いの末、秘宝の清掃と保護作業の中で研究者に奉拝を許し、撮影や記録等はその際に行うことで決着した。その研究者6人の中に小場が入った。

▼▼

いわゆる「お歴々」に並んで小場が選ばれたのはなぜだろうか。当時既に文様学の第一人者であり、その名が挙がるのは不思議ではないかもしれない。学生の頃から各地の寺社を巡って仏像や装飾文様をスケッチし、生涯を通じて寺院建築意匠、仏教美術の模写や復元に尽力し、信仰者への尊厳を忘れなかった小場の研究姿勢が評価された、というのは考えすぎだろうか。

（写真②）新聞記者として活躍した大仙市出身の赤川菊村に贈った「国鱒図」＝県立博物館蔵

県立博物館には生物部門の収蔵品として、小場の作品がもう一つ収められている（写真②）。題材はクニマス。ハタハタと並び秋田を代表する魚で、近年再発見された。残念ながら、描かれたのはクニマスの魚影が田沢湖から消えた後で、不完全な下絵を基に写されたようだ。部門担当によると、あるべき部位がないなど間違いがあるらしい。

ただ、失われた、もしくは失われかけているものの姿を残し、よみがえらせるというのは、小場が長年注力した古の文様を復元する試みに、どこか通じるように感じられる。かつてキノシリマスと呼ばれた名残か、木ぎれと共にゆったりと身を横たえるクニマスの画に筆を走らせながら何を考えたのだろうか。中央で活躍しながら時に故郷に思いをはせることもあったのだろう。

（三浦たみ子・副主幹）

© 秋田魁新報社　20190120（6面）　秋田魁新報